

(5) 成果の公表(活動発表・論文執筆等)**【論文】**

- ・山崎保寿「地域にある小さな図書館の存在意義」教育課程研究会『教育課程研究論集』第8号、2020年10月、pp.99-100(2021年度の活動に関する先行事例)

【活動発表】

- ・山崎保寿「地域民話を取り入れた絵本童話の作成と活用による地方の文化創生」第10回松本大学教員研究発表会、於松本大学、2022年2月24日
- ・山崎保寿「民話絵本と地域素材の活用について」松本大学有志研究会、2022年3月1日

9. 地域における実践的マーケティング活動

松商短期大学部商学科 金子 能呼

(1) 活動計画

担当科目がマーケティングであり、学生とともにマーケティングの知識を活用し、実践に移すことを主眼に置き、活動を展開する。

主力の活動として位置づけているのが、おにぎりの商品開発である。地元JAから依頼があり、JAのブランド米を使用したおにぎりの商品開発を13年前より続けている。これまでの成果を踏まえ、活動内容をさらに充実化することができるよう、オリジナリティ溢れるレシピづくりに挑戦するつもりである。学生に対しては、地域での実践的な活動やアクティブラーニングを導入することにより、主体的かつ能動的に学習する力が身につくことが期待される。学生が得られる教育成果を大きくするとともに、生産者や地域へのフィードバックとして、レシピの紹介やレシピ集の配布など、より積極的に行いたい。

また、2014年からバレンタインスイーツの企画・販売のプロジェクトにも関わることとなり、継続的な取り組みとなっている。学生は地域のパティシエたちと共同でスイーツを企画し、実際にお客様とコミュニケーションをとりながら販売する。お客様に喜んでいただけるよう創意工夫することで学生が鍛えられるとともに、売り上げに直結する活動であり、良い意味で緊張感を伴う実践的な取り組みである。地域の食材をおいしいスイーツとして販売することで、地産地消に貢献することにもつながると考える。

以上の活動であるが、コロナ禍において実施困難と判断される場合も、活動目標を達成することができるよう、地域に目を向け、地域の企業と連携することを前提として、商品の企画・販売を行うことを予定している。目的のための手段については柔軟に変更することを視野に入れ、新たな挑戦や試みを積

み重ねるよう努めたい。

(2) 活動の内容と成果

卒業研究のテーマであり、主力の活動として位置づけているおにぎりの商品開発については、昨年度に引き続き、今年度も学内で試作や試食をすることが難しい状況であった。そこで、自宅で試作を繰り返し、ゼミナールの時間にはオンラインまたは対面にて自分のレシピを発表し合った。

発表されたレシピをほかの学生が試作し、改良につながるように感想やアドバイスを伝え合うということを繰り返した。今年度も昨年度に引き続きテーマを「インスタ映え」としたため、おいしいだけではなく、見栄えも考慮したレシピづくりに取り組んだ。

学生はパワーポイントを使用して自分のレシピをプレゼンテーションし、その後チームごとに議論の場を設け、レシピの改良を図った。今年度は試作ができなかったものの、毎回のようにプレゼンテーションを行ったため、わかりやすさを重視したまとめかたや見せ方の工夫が見られ、表現力が強化されたことが最大の成果であった。おにぎりづくりについても、自宅で試作に取り組む時間が確保されたこともあり、非常にクオリティの高いレシピもいくつか完成させることができた。

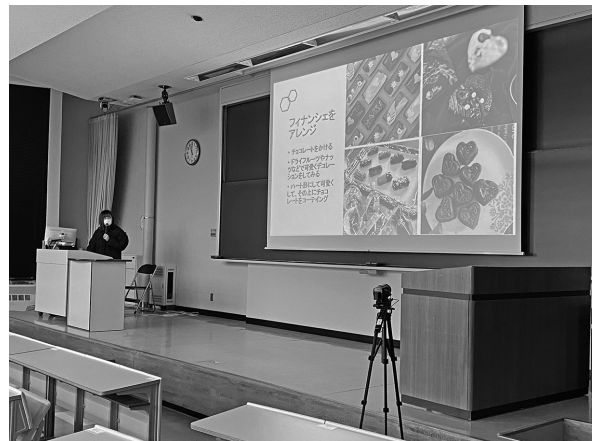
バレンタインスイーツの企画についてもプレゼンテーションを行い、コンペの段階までは進めることができたが、その後はコロナの警戒レベルが上がってしまい、イベント自体が中止となってしまった。とはいえ、バレンタインスイーツの企画は1年生も挑戦することができ、多彩な提案がなされた。

さらには、今年度初めての試みとして、1年生が岡山県吉備中央町の米粉ピザグランプリに出品する

こととなった。吉備中央町についてはまったく知識がなかったため学生が手分けして調べ、特産品をどのようにピザづくりに活かすべきか、議論した。そして吉備中央町のプロモーションにつながるようなピザの提案、企画づくりに取り組み、グランプリおよび優秀賞を受賞することができたのはうれしい成果である。

実践的な活動においては、緊張感と責任感を持って活動するなかで、マーケティングの本質を理解し、

マーケティングを実践する力を身につけることができる。また、今年度はとくに発表する機会が多く「伝える力」が求められたため、活動においてもそこに注力することができた。また、対面ではグループディスカッションを必ず行うようにして、チームで働く力を意識的に強化しようと試みた。学生自身、コロナ禍だからこそコミュニケーションの大切さを実感することができたのではないかと考える。





(3) 成果の公表(活動発表・論文執筆等)

研究成果は学生が卒業論文にまとめ、教員は学内研究発表会で報告を行った。さらに、活動の成果をおにぎりレシピ集としてまとめた。

10. 「ヒカルの碁(子ども囲碁教室)」及び「中农信地区団体戦親睦囲碁大祭」の開催

名誉学長 住吉 廣行

(1) 活動計画

ヒカルの碁に始まる囲碁ブームは、AIの進展により再び脚光を浴びている。子ども達にとっては柔らかい頭脳を活性化させると共に礼儀作法やルール遵守を身に付ける効果もある。地域で学ぶ子ども達を対象として、プロ棋士の指導を含め棋力向上を目的とした囲碁教室を開催する。また地域の子どもの指導する大人の棋力向上と、高齢者の健康維持を目的とした団体戦を並行して実施する。

(2) 活動内容

全県的に中止が相次いでいた各種囲碁大会であったが、本学で開催された上記大会は、コロナ禍が一時的に収まっていた合間を縫って、奇跡的に行うことができた。しかし警戒感が高く、通常行われていた時の参加グループ、参加者に比べ半数程度になってしまった。それでも、地域における囲碁の普及や棋力の向上を図る、プロ棋士を招いての子ども教室の開催や年齢の枠を越えての老若男女の交流を目指す団体戦の開催は、一つの光明を与えるものになった。

(3) 活動の成果

1チーム3名からなる団体戦に26チーム78名が参加、

ヒカルの碁には17名が参加した。これは通常時の約半数の参加にとどまったとは言え、久しぶりの大会に囲碁愛好家には大いに喜ばれた。囲碁の普及、棋力向上に尽力する松本大学は、すでに日本棋院からその功績に対し表彰されており、今回もその延長線上に位置づけられた成果だったと言える。特にヒカルの碁に参加した少年少女や団体戦に出場した子ども達は、プロ棋士の指導碁を受けることが出来たため、同伴した保護者からも高く評価していただいた。囲碁愛好家の中での松本大学に対する評価や今後の大会継続への期待も高まったと思われる。また本学学生の大会準備への支援もあり、円滑な大会運営ができており、この点でも参加者や棋院関係者から高い評価を受けている。

(4) 成果の公表

名誉学長の住吉廣行が投稿した記事が「信州囲碁新報」(2022年4月1日号)に掲載された。